



錦鯉の池の水質基準値 – 早見表

h2koi.com · 2026-08-04

要点

- pHは7.0～8.5であれば許容範囲。数字そのものより、一日を通して動かないことのほうが重要です。
- KH（炭酸塩硬度）は6～10 dKH（105～180 ppm）が最適域。5 dKHを下回ると不安定、3 dKHを下回るとpH暴落が起きる領域です。
- 溶存酸素は8～10 mg/Lが快適域、7 mg/Lが下限。6 mg/Lを切ればストレス、4 mg/Lを切れば急性の危険です。
- 検査の頻度は「項目ごとの動く速さ」で決めます。硝酸塩は月単位で足りますが、溶存酸素とアンモニアは一晩で状況が変わります。

項目	何を示す値か	目標値	外れているときに起きていること	変化の速さ
水温	池全体の代謝速度と、水が酸素を溶かしこめる上限を決める値	適水温18～24℃。対応範囲はおおむね5～30℃	高すぎれば代謝だけが上がって酸素が足りなくなる。低すぎれば免疫が落ちる。急変そのものが負荷になる	季節単位。ただし浅い池や小さい池は、晴天や寒波で半日から一日のうちに数℃動く
pH	水の酸性・アルカリ性の度合い。アンモニアの毒性を左右する	7.0～8.5。日内変動は0.5以内が理想	高いほど、同じアンモニア量でも毒性の強いNH3側に寄る。低い側への急落はKHの枯渇を意味する	日中と夜間で上下する。KHが尽きた池では数時間で暴落する
KH（炭酸塩硬度）	pHを支える緩衝力の残量	6～10 dKH（105～180 ppm）	5 dKH未満で不安定。3 dKH未満はpH暴落が現実にかかる領域	数週間かけてじわじわ消費される。残量が少ない状態からの最後のひと押しは速い
GH（総硬度）	カルシウム・マグネシウムなどミネラルの総量	おおむね60～200 ppm。緩衝力の指標ではない	極端に低ければ浸透圧調節の負担になりうるが、pHの安定とは別の話	ほとんど動かない。月単位
アンモニア（NH3）	ろ過が追いついていない量のうち、えらを直接傷める側	0 mg/L	検出された時点で、ろ過・給餌量・収容量のどれかが破綻している	数時間。pHと水温が上がらただけで、総アンモニアが同じでもNH3は増える
アンモニウム（NH4）	総アンモニアのうち毒性の低い側。NH3を求める元になる値	低いほどよい（NH3算出の基礎値）	高ければ総アンモニアが高い。pHと水温しだいNH3側へ転じる	アンモニアと同じ
亜硝酸（NO2）	硝化の二段目が追いついていない量	0 mg/L	血液の酸素運搬を妨げる。急性毒性がある	一日から数日。立ち上げ期やろ材を洗った直後に跳ね上がる
硝酸塩（NO3）	系にたまった負荷の総量	40 mg/L（ppm）未満が目安。低く保てるほどよい	ただちに効く毒ではないが、上がり続けている事実が換水量・給餌量・収容量の見直しを促すサイン	数週間かけて蓄積する。急変しない
溶存酸素（DO）	実際に水に溶けている酸素量	8～10 mg/Lが快適域。7 mg/Lが下限	6 mg/L未満でストレス、4 mg/L未満は急性の危険	数時間。夜間から夜明け前にかけて最低値をとる
塩分濃度	治療目的で意図的に入れた塩の管理値	平常時は加えない。使う場合は0.3%（3 ppt）程度を目安に、期間を区切って指示に従う	いま何%なのか読めていない状態での追い塩が、いちばん危険な操作になる	投入時に人為的に動く。以後は換水と降雨でゆっくり薄まる
ORP（酸化還元電位）	水が酸化的か還元的かの傾向	清浄な池でおおむね250～400 mV。絶対値ではなく傾きを見る	平常値から下向きに離れていくときは、有機物負荷の増加やろ過の不調を疑う	数時間から数日

項目	何を示す値か	目標値	外れているときに起きていること	変化の速さ
濁度	濁りの度合い	澄んだ池で数NTU台。平常値からの変化を見る	急な上昇は、藻類の崩壊、底の巻き上げ、ろ過の破過などの前触れであることが多い	数時間から数日

